

「妖怪」アスワンの民族誌以前

—フィリピン民衆信仰研究への予備的考察—

東 賢太朗

1. はじめに

筆者は、「フィールドワークを行い、民族誌を書く」というワークによって成立する／してきた文化人類学という学問を志している。調査地は、フィリピンのパナイ島という一地域であり、そこで民衆信仰についての聞き取りや参与観察を行ってきた。本稿は、その調査の中で「出会う」こととなったアスワン (*aswang*) という聞きなれないものを対象として扱っていく。しかし、本稿の内容は、筆者自身の調査をもとにした民族誌でもなければ調査の中間報告でもない。それは、これまでのアスワンに関する歴史的記述や学問的記述を批判的に検討していこうという試みである。

フィリピンは、人口の85%以上をカトリック教徒が占める、いわゆる「カトリック国」である。その状況の中、民衆信仰を研究する際には必然的にカトリックと向き合わざるをえない。呪術や精霊信仰、また本稿で対象とするアスワンのようなものに対して、「正統」なカトリックは常に何らかの形で影響を及ぼしてきた。当然、民衆信仰を研究する研究者に対してもそれは影響を与えている。文化人類学のパラダイムに固執しようとする筆者のような人間が、民衆信仰の民族誌的な研究を行う以前に考えるべき、また考えざるをえないこと、すなわち民族誌「以前」を本稿では扱っていく。具体的にはそれは、フィリピンの民衆信仰の研究において、必然的に内包されるカトリックからの「まなざし」を明らかにし、民衆信仰の民族誌的研究に向けての新たな視座を提示するものである。

ここで、「アスワンとは？」といういまさらの序説を行うとすれば、それはフィリピン全土、特に低地キリスト教社会で語られる「妖怪」的な存在といえるであ

ろう。日常生活のみならず、小説や映画、ニュースなどのメディアにおいても頻繁にアスワンは語られる。本稿では、アスワンを民衆信仰の一つの例として提示し、その歴史的・学問的記述の中での表象を追うことで、同時にアスワンという民衆信仰のあり方を示していくことになる。

2. アスワンの歴史的記述

フィリピンの歴史資料には限界がある。スペインの植民地化以前のフィリピン人による文字資料はほぼ皆無であるため、本稿でも15世紀末の植民地化以降、しかも植民者側の資料を中心に扱っていくことになる。実際に扱う歴史資料は *The Philippine Islands* [Blair & Robertson 1903-9]、これはスペイン人宣教師や行政官による、15世紀末から19世紀末の植民地下フィリピンに関する全55巻の報告書集である。この中には、アスワンに関する直接的な記述が二箇所見られる。

一つ目は、16世紀末に Plasencia によって書かれた “*osuang*” に関する記述である。そこで “*osuang*” は、「悪魔 (devil) に仕える12種類の司祭」[Plasencia 1903-9: 194] の一つとして、その他の「司祭」と共に描かれている。

…8番目は *osuang* と呼ばれ、これは邪術師（英語版では *sorcerer*）と同義である。空を飛び、人間を殺しその肉を食べると言われている。これはビサヤ諸島にのみ見られ、タガログ族の間には存在しない [Plasencia 1903-9: 192-4]。（カッコ内筆者）

二つ目は、17世紀末の Ortiz による “*usang*” の記述である。Ortiz は “*usang*” を、「我々カトリック教徒の聖なる信仰や良い慣習に反して、住民が行う悪習」[Ortiz 1903-9: 104] の一つであるとし、その他様々の「悪習」と共に描いている。

…彼らは、*tictic* と呼ばれる鳥が、*usang* という邪術師（英語版では *sorcerer*）の仲介者だと主張する。*usang* を先導して飛びながら、その鳥は子供が生ま

れたばかりの家を示す。*usang* は屋根の上のにり、そこから長い舌を糸状にのばし、子供の肛門に刺し入れ、内臓を吸い出し殺してしまう。[Ortiz 1903-9: 108]。(カッコ内筆者)

以上二つの記述から分かることは、少なくとも植民地化のかなり早い段階から、当時フィリピンの人々の間で「超自然」的なものとしてアスワンが語られていたこと。そして、植民者であるスペイン人たちは、それを自分達が信仰するカトリックの神や教えに「反する」ものとして捉えていたということである。

Plasencia の記述と Ortiz の記述の間には約 1 世紀の隔たりがあるが、その期間とは 1521 年のマゼランのセブ島来航以降、フィリピンに急速にカトリックが布教された時期でもあった。時を隔てた二つの記述から、植民地化にともなうカトリック化を経験しながらも、アスワンはフィリピンの人々に語られ続けていたということを知ることができる。

それに対しスペイン人側は、アスワンを「悪魔」や「悪習」として扱う。スペインがフィリピン植民地化において、カトリックの布教を重視する、いわゆる「内なる植民地化」を重視していたことはすでに指摘されている¹。植民地化と、それにともなうカトリック化の過程で、スペイン人たちはアスワンという「土着の信仰」をカトリックに「反する」ものとして捉えていたのである。

3. アスワンの学問的記述

3-1. Ramos の研究

Maximo D. Ramos はフィリピン人の民俗学者であり、フィリピンの口頭伝承に関して数多くの著作を残している。アスワンの研究 [Ramos 1990] における語りの収集はフィリピン全土に渡り、範囲、集めた語りの数、記述の詳細さは他に類を見ない。アスワンについて触れた論文の多くは、必ずといっていいほど Ramos の業績について言及している。いわば Ramos は、アスワン研究の第一人者であるといえよう。

Ramos の口頭伝承の研究全般にみられる手順は、① フィリピン各地で語られ

る語りの収集、②収集した語りの分類、③分類にもとづく分析、である。アスワンの研究にもこの手順が用いられている。

①収集について、以下はその方法を端的に示している Ramos の著作からの引用である。

…学生達は、インフォーマントから聞き書きした情報を、また時には記憶して書き記したものを、5×8インチのカードにまとめて報告する。…これほど多くの情報がこれほど早く集まったことは、フィリピン社会におけるアスワン伝承の総量と、その流通を指し示していると言えるであろう [Ramos 1990: xxxiii]。

この引用からは、二つのことが指摘できる。一つは、語りが「5×8インチのカード」という画一化された形式で Ramos の手に渡ること。学生達が行う聞き取りの段階では、「5×8インチ」におさまりきらない様々な情報が集まったであろうと想像できるのだが、それが Ramos に提出される時には、ほぼ同じ分量に統一され、簡潔に起承転結が述べられた「5×8インチ分の語り」として Ramos の著作に掲載されることになるのである。もう一つは、語りの「量」が重視されているということである。語りが「大量」に「流通」していること、そして収集地域に偏りがないことが、①収集においては求められている。

②分類で Ramos は、フィリピン各地から収集したアスワンの語りを5種類に分類する。すなわち(a)人食い鬼、(b)獣人、(c)内臓吸い、(d)吸血鬼、(e)妖術師、の5種類である。この分類は、西欧の民間伝承における分類を基準としている [Ramos 1990: xvi]。しかし(b)獣人について、「フィリピンには狼が存在しないので、犬人という用語が最も適しているかもしれない」 [Ramso 1990: xxiii]、また(c)内臓吸いについて、「西欧の民間伝承にはほとんど現れず、むしろマレーシアに幅広く分布している」 [Ramos 1990: xviii] など Ramos 自身が述べているように、「西欧の民間伝承における分類」をアスワンの語りに適用する場合には、必ずそれに収まりきらない語りが存在することになる。

収まりきらない「西欧の民間伝承における分類」を用いることに対して Ramos

は、「混乱を整理」し、「より秩序づけられた学問の伝統」に従うためであると述べている [Ramos 1990: xvi]。つまり ② 分類とは、学問的「周辺」に位置するフィリピンの民間伝承を、「中心」である「西欧」に対して通用させるために必要だったのである。

③ 分析では、② 分類で行った5つの分類それぞれについて Ramos が分析を進める。この分析において最も力点が置かれているのが、「フィリピンの文化事象とアスワンの関係」の濃密さである。以下は、(c) 内臓吸いについての分析である。

…フィリピンにおける複合家族の構成と、国連統計によれば世界で2、3番目に速い急速な国家人口の増加は、小家族が内臓吸いに攻撃されやすいという恐れが一つの理由となっている。多くのフィリピン地方村落の家庭は、典型的な一部屋での生活である。料理、食事、労働、くつろぎや睡眠全てがその一部屋で行なわれる。家族のメンバーは大きな蚊帳の下で、一枚のマットを床に敷いて一緒に寝る [Ramos 1990: xx]。

この引用では、フィリピンの大家族とその居住形態の理由が、アスワンとの関連に求められている。その他の分析でも儀礼、人間関係、家族、結婚、気質など、幅広く生活全般についての文化事象が、次々とアスワンとの関連によって説明されていく。また、それら文化事象がフィリピン内外から「フィリピンに独特」な文化事象として認識されていることも注目に値する。

以上、① 収集、② 分類、③ 分析、という手順をとおして Ramos のアスワン研究を概観してきた。まとめるならば、① 収集において「量」的に集められた「5×8インチ分の語り」は、② 分類の段階で、「西欧の民間伝承における分類」を基準として、「より秩序づけられた学問の伝統」に従ったものとなる。そして③ 分析において「フィリピンの文化事象とアスワンの関係」が明らかにされるのである。Ramos の分析はいささか、強引な印象を受けるのだが、① 収集によって「客観性」が、② 分類によって「権威」が付与されているために、その「学問」としての説得力を持ち続けることができる。

「学問」としての確かな手続きを行い、「フィリピンの文化事象」はアスワンから説明された。今やアスワンについて学ぶことは、そのまま「フィリピンの文化事象」、それも「独自の文化」について学ぶこととなったのである。さらに、対象としてのアスワンも、「迷信」や「俗信」ではない「学問」的研究対象として、「フィリピン独自の文化」に取り込まれていくことになる。アスワンの研究により、「フィリピン独自の文化」を提唱していくこと、そしてアスワンを「フィリピン独自の文化」に取り込んでいくこと。Ramosの研究はこの二つの意図を持って行なわれたと考えられるのである。

3-2. Lynch の研究

Frank Lynch はアメリカ人の人類学者であり、またイエズス会の神父でもある。フィリピンというフィールドで、様々な対象についての人類学的研究を行った Lynch は、アスワンに関する論文も著している [Lynch 1963]。この中で Lynch は、ビコール (Bikol) 地方におけるアスワンの語りを収集・分析した。すでにアスワン研究における古典ともなっているこの論文は、他のアスワンを扱った論文で参照される頻度も高い。

Lynch の語りの分析において鍵概念となるのは、彼が別の論文 [Lynch 1975: 123-4] で概念化を行った「フォーク・カトリシズム」²概念である。Lynch は、まずカトリック教徒の宗教活動を「公式」と「非公式」の活動に分類する。そして、「公式」の活動を公教会により「規定」または「奨励」されるもの、「非公式」の活動を「黙認」、「不許可」、「非難」されるものとする。そして、「フォーク・カトリシズム」とは、「黙認」、「不許可」、「非難」の「非公式」に分類されるものであり、かつ民衆的起源を持ち、実践され、そのコミュニティにおいて伝統として認められている場合を指すと定義されている。

この「フォーク・カトリシズム」概念を用いながら、Lynch は収集したアスワンの語りの分析を進めていく。以下はアスワンになる可能性のある人間についての引用である。

…アスワンになる可能性があるものは、神への信仰が薄いものや無いもので

あり、また仲間を信用しないものである。彼は通常の人付き合いを嫌い、神と教会に関する全てのものを軽蔑し、秘密主義で、反社会的で、非人間的な生物である。…アスワンになる人間とは、神や人間と不和であり、悪霊と仲間のアスワンとのみ親しくするものなのである [Lynch 1963: 140]。

上の引用ではアスワンの属性として、「神」に反し、そして「悪霊」と親しくすることが挙げられている。次の引用は、アスワンから身を守る方法についてである。

…アスワンから身を守る方法の多くは、キリスト教に関連している。アスワンの攻撃は、聖水、シュロ、香、十字架などにより避けることができる [Lynch 1963: 153]。

アスワンから身を守るために用いられるのは、キリスト教に関連するものであると Lynch は述べている。Lynch は、「キリスト教との関連」や「キリスト教との合成」という表現をよく用いるが、アスワンに関する諸事象を「キリスト教」そのものと明言することはない。以下は、Lynch の結論である。

この（アスワンに関する）信仰は、キリスト教に由来する概念と共に、多くの模倣呪術の要素を含んでいる [Lynch 1963: 158]。（カッコ内筆者）

結論部分でも、「キリスト教との関連」は認めながらも、「模倣呪術」の要素が多く見られるという指摘がなされている。

以上、Lynch によるアスワン研究の概観から二つのことが指摘できる。一つは、全体を通じてアスワンの語りの中に、「キリスト教」的な要素と、「非キリスト教」的な要素を見出す分析が行われているということである。「神」や「十字架」に対しての、「悪霊」や「呪術」。そこには明らかに、「カトリック」と「土着」の習合形態としての「フォーク・カトリシズム」概念の導入をうかがうことができる。もう一つは、アスワンが常に「非キリスト教」的要素として描かれるのに対

し、「神」や「教会」などの「キリスト教」的要素はアスワンと対立するものとして描かれていることである。「フォーク・カトリシズム」概念によって見出された「キリスト教」と「非キリスト教」は、融合や共存としてではなく、常に対立するものとして描かれるのである。

Lynch の「フォーク・カトリシズム」は、「非公式」のカトリック（「黙認」、「不許可」、「非難」）に分類されると定義されている。しかしながら、「フォーク・カトリシズム」概念は、アスワンの周辺に「カトリック」の要素を見出すことはできても、アスワンをその中に取り込むことはできない。Lynch の研究は、「フォーク・カトリシズム」概念の適用によりアスワンを常にそのモデルの少し外側、つまり「カトリック」の周辺に位置付けたのである。

3-3. Demetrio の研究

カトリックの神父 Francisco Demetrio は、比較宗教学という立場からアスワンについての研究を行った [Demetrio 1988]。この研究では、前述の Ramos や Lynch などの研究を民族誌資料として扱っており、またアスワンを妖術師 (witch) と同義に用いている [Demetrio 1988: 372]。

Demetrio はアスワンに関する事象を、「同じく古代の事象」であるシャーマンの事象と対置させる。そして両者は共に「聖なるものへの反応として人間が創造した二つの基本的な態度」であるとし、そこから「聖なるもの」、「シャーマン」、「アスワン」の関係に宇宙の「聖なる秩序」を見出していく [Demetrio 1988: 372]。

Demetrio は、シャーマンを「全ての局面で聖なる秩序に供するもの」とする。シャーマンは、透視能力、予言能力、相談、(肉体的、心理的、精神的な) 病治しなどを用いて、「まさに他者のために存在する」ものである。また、それは「個人だけでなく、共同体のために善行や平和、そして生命を促進させる」ものでもある [Demetrio 1988: 374-6]。

シャーマンに対し、アスワンは「聖なる秩序」に反するものであるとして、Demetrio は①近親相姦と獣姦、②人食い、③人間の排出物への嗜好、の3つの属性を挙げる。まず、①近親相姦と獣姦について、「通常の人間」は異族結婚

をし、また異性と性交し、人間同士で性交を行うのに対し、アスワンは「近親を性交の相手」とし、「獣との性交にふける」ことで、その秩序に反するものであるとする。次に②人食いに関しては、「聖なる秩序」に従い、人間は人間以外の肉を食べる事で人間性を高めてきたのだが、アスワンはその秩序に反し人肉を食べるとする。最後に③人間の排出物への嗜好については、血液（特に生理中の）、痰、髪、爪、汗のしみついた服、排泄物などが、再び地に帰り腐敗することは「宇宙の変化の過程であり、また生命を支えるものでもある」とした上で、それらを集め、時には人に害を為す強力な薬として使うアスワンは、「宇宙の中で行なわれねばならない自然の相互作用と変化の過程」を邪魔するものであると述べる [Demetrio 1988: 377-8]。

以上が、Demetrio によるシャーマンとアスワンの対比である。「他者」、「共同体」、「聖なる秩序」に供するシャーマンに対し、それら全てに反するアスワン。両者の存在により、「聖なる秩序」の存在はより明確なものとなる。アスワンもシャーマンが「供する」のと同じく、「反する」ことにより「聖なる秩序」を強化しコスモロジーを完成させる一要素なのである。暴れば暴れるほど、反すれば反するほどアスワンは「聖なる秩序」を強化していく。一見無秩序に暴れまわるかのようなアスワンを「聖なる秩序」の中に取り込み、Demetrio は完成されたコスモロジーを提示した。

しかし、Demetrio の研究には、そのコスモロジーの完成度ゆえに湧きあがる疑問がある。Demetrio 自身が明らかにしているように、比較宗教学と言う立場から行なわれたこの研究は、先行の諸民族誌データの上に成り立ったものである。それに加え、西欧の妖術師 (witch) に関する資料も頻繁に用いられている。さらに、“the Other” や “the Divine”、“the Holy” といった表現によって、特定の「神」への言及は避けられているものの、そこに示されているのはキリスト教の世界観を明らかに想像させるものである。頻繁に顔を出す「通常」や「規範」という表現の背後にも、自身がカトリックの神父である Demetrio の倫理観が見られる。

そのような資料の用い方や、世界観・倫理観を背景に行なわれた研究の中では、アスワンは、確かに「反する」存在としてコスモロジーを完成させるであろう。

しかし、それは、「悪魔」が「神」と対立することで完成されるカトリック的な視点を、アスワンに適用した結果に過ぎないのではないか。Demetrioの研究の方向性は、「神」を中心とした完全なるコスモロジーの提出にある。そのためにアスワンは、フィリピンの「悪魔」的存在としてカトリックの中に取り込まれていくのである。

4. 考察

ここまで、アスワンの歴史的・学問的記述について個別の検討を行ってきた。本稿で検討の対象となった記述の量は、歴史資料の限界、また先行研究の少なさを考慮しても、何らかの一般化された結論を導き出すには物足りない。だが、それらの中に共通して見られるものを抽出することで、少なくともアスワンという民衆信仰の記述に見られる問題点と、その対策としての新たな視座を提示することは可能ではないだろうか。以下では本稿の問題意識に従いフィリピン民衆信仰の民族誌的研究にむけた予備的考察を行う。

全ての記述について、まず共通して見られるのは、アスワンの語りが語られる際に個々の文脈が切り捨てられるということである。記述者自身が直接、全ての語りを集めることが不可能だったという技術的制約を差し引いても、各記述の中で用いられている語りにはあまりにも具体性が乏しい。つまり、「いつ、どこで、誰が」といった語りの個別性が軽視され、むしろ「いつか、どこかで、誰かが」という匿名化された一般的な語りが扱われるのである。「5×8インチのカード」の例のように、量的な収集と分類・分析を可能にするためには、ほぼ同じ分量で、起承転結が簡潔に記された語りは有効であろう。しかしながら、その過程で切り落とされる個々の文脈とは、登場人物の微細な生活背景、語り手のためらい、さらには聞き手の印象など、語りを流動的かつ多面的にする構成要素である。それらを切り捨てた、輪郭が整えられた語りの分類・分析とは、本来動態的であったはずの語りを静態的なものへと固定化していく「脱文脈化」の作業であると考えられるのである。

次に指摘できる各記述の共通点とは、アスワンが「カトリック／土着」という

二分法の範囲内で記述されているということである。歴史的記述の中では、アスワンが「カトリックに反する土着の信仰」として描かれていることは明白であるが、それは学問的記述にも当てはまる。Lynchが「フォーク・カトリシズム」概念によってアスワンをカトリックの「周辺」に位置付けること、Demetrioのカトリック中心のコスモロジーがアスワンを「包摂」すること、そしてアスワンを「フィリピン独自の文化」とするRamosが、そのために歴史資料と同じく、アスワンをカトリックから「切断」せざるをえなかったこと。それら全てが、カトリックという点から土着という点まで引かれた線分の範囲内で行なわれているのは偶然ではない。そこには、フィリピンの民衆信仰を「正統」なカトリックの視点から見つめる「まなざし」がある。それを「カトリック教会側の視角」[関 1997: 406]と呼ぶならば、その視角のもとに一連の<「包摂」―「周辺」―「切断」>の働きがある。

以上をまとめるならば、本稿で検討した歴史的・学問的記述に共通するのは、民衆信仰としてのアスワンの語りを固定化した静態的なものとしてとらえ、「カトリック教会側の視角」を内在させた記述である、といえよう。それでは、そういった「民族誌以前」に対し、筆者はどのようなアスワンの、そして民衆信仰の民族誌を想像できるのだろうか。

現在考えうるのは、「脱文脈化」に対しての「再文脈化」、「カトリック教会側の視角」に対して「カトリック圏の民俗慣行あるいは生活世界」[関 1997: 406]への焦点の移行である。つまり、今まで切り捨てられてきた個々の文脈を拾い集めると同時に、「正統」なカトリックという「まなざし」に絡み取られないようなポジションを創造するということである。それにより、民衆信仰という民俗知を、カトリックに照射された静態的な分配論ではなく、動態的な運用論として捉えなおすことが可能になる³。しかし、これら容易に見える一問一答式の回答は、「民族誌記述」という実践においては非常に困難なものとなる。本稿を民族誌「以前」とした理由もそこにある。ここで、一応ながらも提示したフィリピン民衆信仰の民族誌的研究への視座が実践のレベルで可能となった時、それが近年の民族誌批判にも耐えうる新たな人類学の第一歩となるのであろう。

註

- 1 フィリピン植民地化におけるスペインの政策については [Phelan 1959] に詳しい。
- 2 「フォーク・カトリシズム」について詳しくは、[川田 1988] や [寺田 1986] を参照。
- 3 「知識の分配」論については、[シュッツ 1980: 246-55] を参照。またギアーツの、「宗教の人類学的研究は、それゆえ二段階の作業である。第一は、宗教を宗教たらしめている諸象徴に具体的に表されている、意味の体系の分類である。そして第二は、それらの体系を社会構造的、心理的過程に関係づけることである」[ギアーツ 1987: 208] という発言は、第一段階の重要性を指摘するギアーツの意図に反して、運用論の必要性を喚起させるものと考えている。

主な参考文献

- Blair, E.H. and J.A. Robertson (eds.) (1903-9) *The Philippine Islands, 1493-1898*, 55 volumes, Cleveland: A.H. Clark.
- Demetrio, Francisco R. (1988) "Shamans, Witches and Philippine Society", *Philippine Studies*, 36.
- ギアーツ、C (1987) 『文化の解釈学Ⅰ・Ⅱ』岩波現代選書。
- 川田牧人 (1988) 「民衆の中のキリストーフィリピン民衆信仰論序説」『族』6号。
- Lynch, Frank S.J. (1963) "Ang Mga Asuang: A Bikol Belief, Field Reports and Analyses", *Bikol Area Source Collection (Religious belief and Behavior Series)*, Bikol Area Survey, vol. I, Ateneo de Naga.
- (1975) "Folk Catholicism in the Philippine", M. R. Hollnsteiner et al. (eds.), *Society, Culture and the Filipino*, Trial Edition, Vol. 2, Institute of Philippine Culture, Ateneo de Manila University.
- Ortiz, P. Tomas, "Superstitions and Beliefs of the Filipinos", vol.43, pp.103-112, in E.H. Blair and J.A. Robertson (eds.) (1903-9) *The Philippine Islands, 1493-1898*, 55 volumes, Cleveland: A.H. Clark.
- Phelan, John Leddy (1959) *The Hispanization of the Philippines: Spanish Aims and Filipino Responses, 1565-1700*, University of Wisconsin Press.
- Plasencia, Juan de, "The Custom of the Tagalogs", vol.7, pp.173-197, in E.H. Blair and J.A. Robertson (eds.) (1903-9) *The Philippine Islands, 1493-1898*, 55 volumes, Cleveland: A.H. Clark.
- Ramos, Maximo D. (1990) *The Aswang Complex in the Philippine Folklore*, Phoenix Publishing House.

関一敏（1997）「キリスト教世界の祈りと呪い」『民族学研究』（62/3）。

シュッツ、アルフレッド（1980）『現象学的社会学』紀伊国屋書店。

寺田勇文（1986）「フィリピンのカトリック」『文化人類学3』アカデミア出版。

（あずま けんたろう 比較人文学）